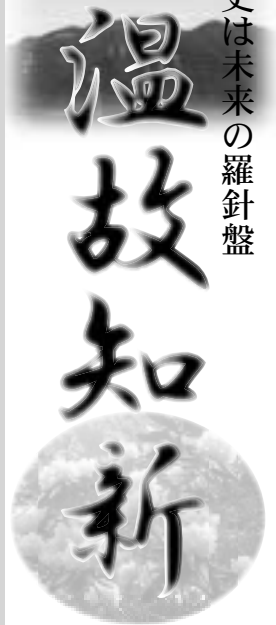


歴史は未来の羅針盤



今月号は、『近江日野の歴史』第二回配本の第五巻「文化財編」の刊行に先立ち、その内容を要約してご紹介します。

多彩で豊富な文化財を網羅 『近江日野の歴史』「文化財編」

文化財編は、四つの章からなり、町内の文化財を網羅します。指定文化財はもちろん、当町の歴史上重要なものや、地域の身近な文化財なども収録します。

《第一章 美の香り》
絵画では、郷土の画人高田敬輔たかたけいほやその門人の代表的作品を多数紹介します。門人には、遠く離れた地で活躍し、名をなした画人もおり、敬輔の影響がいかに大きかったかがわかります。また、日野商人はその経済力と文化的先進性により、各地の文化人との交流が盛んで、京の画人などの活動を積極的に支援していました。

《第二章 匠の文化》
彫刻では、重要文化財など指定を受けた仏像が27体ありますが、新たに室町時代以前の仏像が16体

確認され、日野町は平安時代から仏教信仰が盛んであったことが裏付けられます。

また、当町には、優れた石造品も数多くみられます。それは、蔵王で「米石」という石が採れ、石工たちが住みついたからです。米石は細粒硬質の花崗岩で、加工は難しいが風化に強く、繊細な細工が可能です。この米石があったからこそ、日野が中世石造品の宝庫といわれるのです。

日野を代表する工芸品として、日野鉄砲と日野椀があります。日野鉄砲では、鉄砲鍛冶師かじしの様子的一端が明らかになり、形式編年により日野鉄砲の変遷がわかります。一方の日野椀は、今まで判断基準が曖昧で事実誤認もあったことや、江戸時代後期の日野椀の実態など、新たな成果があげられました。このほか、懸仏かけぼとけ・鰐口わにぐち・梵鐘ぼんしょうなどには、全国規模で最古級に属するものや、製作者の鋳物師いものしの様子が知れる貴重なものがあることがわかります。

曳山では、とくに装飾の中心となる木彫刻・飾金具・染織品について詳細な調査を行い、すべての曳山について実測図を収録します。これにより、曳山の変遷などについて、新たな事実や見解が出され、日野曳山の実態により一層迫ることができます。

《第三章 住の演出》

当町は神社や寺院が多く、宗教建築が豊富ですが、建築のなかでは民家が日野町の特徴をよく表しています。町内には農家・町屋・武家屋敷・日野商人本宅があり、民家建築としては非常に多様です。農家住宅は四間取と呼ばれる土間と4室を基本としています。農家以外でもそれぞれ特徴的な構造がみられますが、主屋は農家と同じ四間取を基本としている点が明らかにあります。

町並みでは、塀を構え道路を意識した景観は、いわゆる都市的な町並みとは異なる、当町独特のもの

のといえます。また、棧敷窓さじきまどは明治時代末〜大正時代以降に設けられるようになったもので、比較的新しい設備であることがわかります。

《第四章 地に根ざす》

天然記念物・考古・祭礼・街道と道標・地域文化財は当町特有の文化財です。地域文化財では身近であるがゆえ、地域に埋もれ、歴史から忘れられがちな歴史資料を紹介いたします。日野小学校の「マリオンベイビー」(アメリカから送られた人形)もそのひとつです。

おわびとお知らせ

文化財編の刊行は2月予定でしたが、編集作業が遅れています。予約済みの方々には、ご迷惑をおかけしますが、今しばらくお待ちいただきますようお願いいたします。刊行の準備が整い次第、改めましてご案内します。

なお、割引特典がある予約申込期限はすでに過ぎています。3月20日(火)まで延長します。予約をお忘れの方や、本紙を読み購いを希望される方は、ぜひこの機会にお申し込みください。